



五月一日
部隊の移動中
女兵士の死体を見かけた。
乱れた衣服の様子から
何者かが亡骸に手を付けた
のであろうことが窺い知れた。



五月三日
拘束した敵軍の捕虜への
輪姦が行われていた。
誰も止める者はおらず、
どうやらここではこのような
非人道的行為が常習的に
行われているようだった。



五月二十日
発見した敵軍の残党兵を
処分するようにと指示を受けた。
戦争法規に違反する行為ではあるが
上官からの指示には逆らうことはできない。
私はこの戦場で初めて人を殺めた。



五月二八日
戦場とは如何に
性的な娯楽が少ないことが。
捕虜を強姦する者や
死体に手を出す者がいることが
腑に落ちる。

私はここへ赴任された当初見た
女兵士の死体を思い出した。
衣服を剥がれ露にされた肌や
死した表情に思いを馳せ
自慰行為をした。

六月三日
ゲウバ高知にて激しい戦闘が起き、
我が部隊からも幾名もの死者が出た。



この戦闘の中で
私は一名の敵兵士の
狙撃に成功した。
私の放った弾丸は
標的の頭部に命中した。

六月四日
新たな少女兵士の捕虜が入った。
必死に助命を懇願する姿が
印象的であった。



そのかいてもあってか
少女は処刑を免れ
我が部隊の男たちの
性処理の役目を
受けることになった。



六月六日
少女兵士はほぼ休みなく
男たちの凌辱を
受けているようだった。
私はこのような下劣な行為に
参加する気はなかったが、
少女のグラマラスな肉体は
たしかに扇情的で
男たちを惑わせるのも窺える。



六月十八日
捕虜の少女兵士は連日の暴行により
衰弱死したようだった。
遺体は使いやすいように解体され、
腐敗が進行するまでの
しばらくの間は使われるようだ。

なんとも哀れな
ものではあるが、
死によって苦しみから
解放されたことは
彼女にとって救いと
言えるのかもしれない
と思った。

人は死ねば唯の肉であり、
そこに命は存在しない。
ならば既に絶命している
彼女の亡骸に手を加えたところで
辱められるはずの命が
存在していないのなら、
彼女は辱められたと
言えるのだろうか？



六月二十日
使えなくなった少女兵士の死体を
私が処分することになった。
俺は彼女の胸を揉みしだきながら
自慰行為をした。
なぜ私は今までこの劣情を
抑圧してきたのだろうか？



生野 千尋 (18)

高等学校3年。徴兵され武装JKとなる。
病気の母と幼い弟を家に残しているため自分の兵士の収入で
家族を支えなければいけないと思っている。